

日本音楽学会 2024 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 1 期採択）

三浦環（1884～1946）生誕 140 年記念 三浦環のシューベルト《冬の旅》

—新発見の訳詞・録音に基づく再現演奏と語りでおくるプリマ・ドンナの人生と芸術—

傍聴記

酒井 健太郎

三浦環（1884-1946）は、日本出身の歌手として初めて世界的に活躍した「日本で初めてのプリマドンナ」（注1）で、近代日本の洋楽（受容）史において触れずに済ますことはできない人物のひとりである。これまでに多くの著作物が彼女の足跡や事績を論じてきた。また彼女の歌唱の録音は CD 化されるなどして聴き継がれてきた。

三浦が死去したのは 1946 年 5 月のことだが、その前月に 3 度にわたり演奏を収録した。このうち 2 度の録音はラジオ放送されたが、そうでない 1 回に収録されたシューベルトの《冬の旅》（全 24 曲）は放送された形跡がなく、CD などにも収録されていない。音源はある放送局に所蔵されているが、一般には公開されていない。言ってみれば「幻の録音」である。

収録の様子を、吉本明光が次のように記録している。「四月五日、三浦さんは放送局の依頼で「冬の旅」を録音した。〔…〕三浦さんは足の指にまでマニキュアをして赤いエナメルを塗りお化粧をしてみた。紫のドレスを着て井上君におぶさつて講堂に行つた。新聞社のカメラマンが盛んに閃光電球を焚く。三浦さんは生卵を一つのんで安楽椅子に腰かけた。プリングスハイムがピアノを弾き出し、録音は開始された。三時から一時間半で録音は終了した。」（注2）

企画者の早坂牧子氏はこの音源にアクセスし、演奏のテンポ、ポルタメント、音高の変更、フェルマータ、歌唱スタイル、歌詞（三浦による訳詞）などを記録した。歌詞の聞き取りが難しい箇所については、1944 年 3 月開催の「軍人援護資金醸集のため 三浦環獨唱會」のプログラム（玉川大学教育博物館所蔵）に掲載された訳詞をもとに補完した。その成果は「三浦環の《冬の旅》：歌詞と 1946 年録音に見る演奏の覚書」と題する 3 つの論考にまとめられた（注3）。こうして明らかになった三浦最晩年の《冬の旅》が、本企画において小林沙羅氏（ソプラノ）と河野紘子氏（ピアノ）により再現された。

三浦は 1914 年の渡欧から 1935 年の完全帰国まで（一時帰国をはさむが）20 年以上にわたって、ヨーロッパとアメリカで演奏活動を続けた。それが可能であった要因には、三浦に対して「オペラを歌う日本人」というエキゾティシズム的な視線が向けられたことがあっただろうが（注4）、それだけではなく、三浦が現地の音楽文化に適応し、求められる演奏様式を体得していたこともあるだ

ろう。また、帰国後の三浦は欧米で認められた音楽家、すなわち権威ある存在として日本の音楽界に影響を与えた。つまり、三浦は当時の欧米のある演奏様式を体現すると同時に、それを日本に伝達した人物であったと位置づけることができる。彼女の演奏を再現する意義の源泉はこの点にある。

ところで、こんにちの日本では、外国語の詞をもつ作品は原語で演奏（上演）されることが多い。その理由には、原語で歌うことにより作曲者が意図した詞と音楽の一体感が担保され、作曲者の意図が正しく再現されうる、（広義の）ベルカント的な発声法が日本語歌唱には合わないといったことが挙げられる。しかし以前には、日本語で演奏することで聴衆は詞の内容を直接的に理解することができると考えられ、訳詞による演奏は珍しいことではなかった。三浦は《冬の旅》を自らの訳詞で歌ったが、そうすることにより、日本の聴衆はW. ミュラーの詩にF. シューベルトが音楽をつけた作品そのものとは異なる音を聴いたことになる。同様のことはほかでも起こっていたはずであり、いわゆる洋楽史研究にあたってはこの点に注意を払う必要がある。

三浦が詞を訳したということは、そこに三浦自身の思いが込められたであろうことも一考に値する。例えば早坂氏の研究により、第23曲〈幻ろしの太陽〉の1944年の公演で「とこやみよ」と訳された箇所が、1946年の録音では「ひかり」と歌われたことが明らかになった。すでに死を予期していた三浦が「一筋の灯りを捨てまいという思い」を込めたのではないかと、同氏は推測している（プログラム掲載の「公演ノート」より）。「三浦訳」で聴くということは、三浦が置かれた状況や彼女の心情を聴くことでもある。

さて、本企画では、《冬の旅》全24曲の演奏の合間に語りを挿入し、三浦の夫、政太郎に見立てた語り手（吉田孝氏）が、三浦の足跡を紹介した（脚本は大石みちこ氏）。いわば音楽物語の形式を採用することで、来聴者はミュラーの詩、シューベルトの曲、三浦の訳詞、さらに後世の三浦受容（評価）という四層の物語を同時に享受することとなった。これは音楽のいわゆる原典主義とは一線を画するものだろうが、音楽の楽しみ方の一つであることは間違いない。こうした工夫をすることで、研究成果の公表と同時に、「楽しめる」公演が実現した。ここに本企画の最大の特長がある。これは研究成果の社会還元の一形態として参考になる。

本企画の実現には大変な労力が割かれたことだろう。関係各位のご尽力に感謝したい。

注1 増井敬二『日本のオペラ：明治から大正へ』、民音音楽資料館、1984年、112頁。

注2 吉本明光「三浦環のプロフィール」、吉本明光（編）『お蝶夫人』、右文社、1947年、339-340頁。（本稿では1996年の大空社による復刻版を参照し、旧字体の漢字は新字体に変換した。）

注3 『東京音楽大学研究紀要』第46～48集、2022～2024年に掲載。

注4 プッチーニのオペラ《蝶々夫人》の題名役が三浦の当たり役であったことから示唆される。